

〔伊呂波字類抄利口〕利口 同幾字興言

〔運歩色葉集利口〕利口

〔書言字考節用集八辨〕便口 利口 出尙書辨口也、辨口義同

〔古今著聞集興言利口〕興言利口者放遊得境之時談話成虛言當座殊有取笑驚耳者也

〔續日本紀三十九年〕延暦七年六月丙戌中納言從三位兼兵部卿皇后宮左京大夫大和守石川朝臣名足薨○中名足○中利口剖斷無滯

〔日本後紀十三年〕延暦二十四年十一月丁丑大納言正三位兼彈正尹壹志濃王薨○中質性矜然不謾禮度杯酌之間善於言笑每侍酣暢對帝道疇昔帝安之

〔續日本後紀仁明〕承和九年十二月戊辰伯耆守從四位上笠朝臣梁麿卒梁麿○中雖無才花以辨了稱承和二年拜左中辨此時諸司有梯本安永者利口之人也自憑口佞屢有所干官喚其身詰問數矣巧避百端不會諾伏梁麿纔發一問安永卷舌而退同僚惧云不及之焉

〔三代實錄清和〕貞觀二年十二月廿九日甲戌從五位下行內藥正大神朝臣庸主卒○中庸主性好戲謔最爲滑稽與人言談必以對事嘗出自禁中向作地黃煎之處途逢友人問云向可處去庸主答云奉天皇命向地黃處此其類也

〔枕草子八〕こきでんとは閑院の太政大臣の女御とぞきこゆる其御かたにうちふしといふものむすめ左京といひてさぶらひけるを源中將方宣かたらひておもふなど人々わらふ比宮のしきにおはしまいしにまいりて時々は御とのゐなどつかふまつるべかれどさるべきさまに女房などもてなし給はねばいと宮づかへをろかにさぶらふとのゐ所をだに給はりたらんはいみじふまめにさぶらひなんなどいひる給ひつれば人々げになどいふほどにまことに人はうちふしやすむ所のあるこそよけれさるあたりにはしげくまいりたまふなる物をときしい